

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520135

研究課題名(和文) 初期日本映画における歌舞伎の影響をめぐる基礎的研究

研究課題名(英文) A basic research about the influence of Kabuki on the early Japanese film

## 研究代表者

児玉 竜一 (KODAMA RYUICHI)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：10277783

## 研究成果の概要(和文)：

映画領域の研究者を主とする国際研究集会において、歌舞伎大道具と映画美術の関わりを発表した。また、映画研究の叢書から、歌舞伎を中心とする古典芸能に特化した書籍を刊行するなど、映画研究において歌舞伎を視野におさめることの重要性を訴えるという点で、一定の成果を収めた。蓄積した基礎的なデータは、劇場から映画館への変遷研究や、歌舞伎由来の映画作品研究に関して、こののち論文化に活用してゆく予定である。

## 研究成果の概要(英文)：

I made a lecture about the relation between the stagecraft of Kabuki and the film arts in the symposium that took place for specialists of the domain concerning the movies. I published not only the collection of the studies about the movies but also books of research conceived for the arts of the traditional theaters (especially Kabuki). By these issues, I succeeded in underlining the importance of the Kabuki theater in the film studies. The data base that I made will be useful for much more deepened researches: the transposition of Kabuki on the screen or the influence of Kabuki into cinematograph will be some examples of these next interesting researches.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文科学

科研費の分科・細目：芸術諸学

キーワード：歌舞伎、映画、劇場

## 1. 研究開始当初の背景

映画史研究は映像研究でもあるので、フィルムが失われてしまったえいがについては、実証的な研究が介入する余地は少なく、幸運にもフィルムの上映に間に合った世代による回顧譚などに終始せざるを得ないことが多かった。

また、研究の初期段階にあたっては、ジャンルそのものの存在意義を確立することを目的とするあまり、先行ジャンルや隣接領域との関わりを無意識のうちに遮断した視野におちいる例なしとはしない。日本映画の研究でも、先行する歌舞伎をはじめとした演劇ジャンルとの関わりや、「活弁」として知ら

れる語り物との密接な関わりなどは、日本映画特有の現象であるがために、西洋をモデルとした映画史研究からは意識的に排除されてきた観がある。さらに、演劇史研究と映画史研究は、それぞれ別途に深められてきた経緯があり、双方に共通理解はほとんど成立していないといっても過言ではない。

だが、初期の日本映画を支えた時代劇スターのほとんどすべてが歌舞伎出身であったことは、紛れもない事実である。初期の映画には女優は存在せず、女性役は女形がつとめていたことも、演劇との近親性を象徴するものである。映画を上映する映画館の多くは、もと演劇の劇場として建っていたものであり、映画における大道具や小道具も、演劇のそれを直接受け継いでいる。そもそも映画で演じられる物語そのものが、講談・浪曲や、歌舞伎や新派で演じられてきたものであることを考え合わせれば、初期の日本映画を考えるにあたっては、演劇の動向を同時に把握する必要があることは、重ねて強調しても過ぎることではない。

## 2. 研究の目的

以下に記す、3つの目標を主題として掲げた。

1) <初期日本映画の上映形態と、それに付随する実演について>。日本映画に特有の上映形態として、映画の上映にあわせて、義太夫や新内、清元などの生演奏が同時に行われていた状況について、その事例と流行時期について調査研究を進めるものである。

2) <歌舞伎劇場から映画館への変遷について>。地方都市における歌舞伎劇場の変遷と、映画館の発生について調査研究を進めるものである。

3) <物語の継承について>。初期日本映画で演じられた物語と、歌舞伎戯曲の系統との関連について調査研究を進めるものである。すでに述べるように、歌舞伎には大芝居・小芝居・旅芝居などの階層があるが、その階層性は上演演目の相違にも比例している。ここでは、小芝居の上演演目、またはその淵源となった演目を系統的に調査することで、初期日本映画の傾向を考察したいと考える。

以上の研究主題によって、歌舞伎研究の側からみれば、近代における歌舞伎受容の裾野の広がりや、歌舞伎文化の継承について、大きな示唆を与えることとなる。逆に映画研究の側からみれば、これまで手つかずの領域が大きかった先行ジャンルとの関わりについて展望が開けるとともに、映画文化がそれ単独で成長してきたものではないという、実証的根拠につながるであろう。それは、大衆文

化の近代における展開を考える上でも、きわめて重要な視座を得ることにつながるものと考えられる。

## 3. 研究の方法

上記の研究主題別に記す。

1) <初期日本映画の上演形態とそれに付随する実演について>

『都新聞』復刻版から、東京の映画館案内によって、各映画館情報を収集して、その実演興行のデータベースを作成する。情報には、上映する映画のみならず、そこに出演して出語りを行う邦楽の演者が記されることが多く、実演に付随する生演奏について知る大きな手がかりとなることが予想される。

2) <歌舞伎劇場から映画館への変遷について>

『全国主要都市劇場略史表』の成果をさらに発展させるべく、同書の調査結果のデータベース化を行う。これを基礎として、地方誌、地方史での劇場・映画館の記述を確認してゆく作業への道筋がみえるものとする。

さらに、劇場から映画館となった建物の所在と外観を補足するには、地方都市の劇場写真を収集するべきである旨を、演劇写真研究の方面からつとに提唱してきた。劇場写真は、絵はがきとして発売されたもののほか、特定の演劇雑誌の口絵に掲載される機会があることが推測される。東京・大阪・京都などの劇場でも、格式高い大劇場の写真は数多いが、中小劇場となると、まったく外観がつかめないものも少なくない。ましてや地方劇場となると、さらに機会は少ないが演劇雑誌の調査を通して、これら画像の収集をめざす。

3) <物語の継承について>

拙稿「歌舞伎から映画へ——「芸能史」としての時代劇映画前史」で言及したところでもあるが、明治初期の作者勝能進・諺蔵らによる上方歌舞伎の作品は、初期映画の題材となった物語と共通するところが極めて大きい。それらの内、多くの作品が松竹関西演劇部に所蔵されているが、現在のところ上演回数が極めて少なく、忘れ去られておりといっても過言ではない。またこれらの作品は、講談でも扱われていたところであるが、今日の高座にかかるレパトリーからは忘れられたといってもいい。これらの洗い直しのためには、いまだ確定的な日本映画作品全リストが存在しない現在、キネマ旬報増刊『日本映画作品大鑑』のデータベース化と、そのデータの確認作業に着手してゆくこととなる。

さらに、松竹関西演劇部に所蔵される上方歌舞伎の台本の総合調査も、ゆくゆくは必要となることが想定される。それと並行する形で、早稲田大学演劇博物館、阪急学園池田文

庫などに所蔵される、上方歌舞伎に関連する歌舞伎台本を調査することとなる。

#### 4. 研究成果

予定していたデータベース化は、ほぼ完了することができた。

『全国主要都市劇場略史表』からのデータ採取は、北海道から鹿児島まで、のべ3, 571件の劇場名を知ることができた。

これによって、たとえば日本全国に「歌舞伎座」を名乗った劇場がどれくらいあったか、といった問いに瞬時に答えることができる(35例)。むろん、このデータベースの各項目を、その土地ごとの資料によって確定してゆくことが、今後の大きな課題となるわけであるが、それに際しても、まず、「その土地事の資料」が整理されていない事例がきわめて多いことから、地方番付の整理が課題となってゆくことが明らかである。これまでの調査に照らしても、地方の番付は、必ずしも地方の土地名を記さないことが多く、一見してどこの土地であるか判断できないものが多い。今回のデータベース化によって、かなりのものが、あたりをつけることができることになる予想され、調査現場での有効性は極めて高い。

さらに、『日本映画作品大鑑』のデータベース化は、全巻には至らなかった最初期の5, 219件についての作品名を総覧することができることとなった。これによって、歌舞伎由来の作品、講談由来の作品、それぞれの可能性を横断的に検証することが可能となった。いずれもフィルムが残っているものは、ほとんどないが、初期映画は絵はがきの対象でもあったので、その作品を同定するための調査での有効性は極めて高い。

絵はがき研究では、演劇関係が最も立ち遅れており、美術研究の一環としての絵はがき研究が取り残した領域となっている。このため、演劇研究のなかの一部、映画研究のなかの一部としてしか認識されていないところであるが、今後、映画絵はがきの考証によって、フィルムが存在していない映画を復元的に考察する段階は必ず訪れるはずで、そうした作業のためにも、本データベースをさらに原資料とのつきあわせによって確実なものとしてゆくことが求められるであろう。

さらに『日本映画作品大鑑』データベース化によって、新派と映画との大きな関わりを、改めて年次を追う形で確認することができた。これと並行して、5の成果項目にないために記すことができないが、早稲田大学演劇博物館における「新派展」の開催に、出品選定、キャプション執筆などに携わり、その縁によって記すことになったのが雑誌【1】である。これと併せて、新派上演年表のデータベース化の必要性を感じ、これを行った。新派

濫觴から昭和53年(初代水谷八重子最晩年)までの3, 220件の興行をピックアップすることができたが、これによって図らずも明らかになったのは、新派の歴史を考える上では、「なにをもって新派と認定するか」という基準が、従来不明確であり、かつ今後の新派研究にとっての最大の障壁となるであろうことである。新派史は、初期映画との関わりも深く、初期映画の現代劇は新派作品の映画化からはじまるというのが定説であるが、その発展と伸長を考える上で、上記「なにをもって新派と認定するか」という問いは、映画研究においても、いずれ不可避のものとなるであろう。

以上のように、所期のデータベース化にもなって、今後の研究課題として「歌舞伎から映画へ」に並行するものとして、「新派から映画へ」とでもいうべきものが、具体的に形を取って現れたこともまた、成果のひとつと考えたい。新派の正史はまだ誰も編んだことがなく、共有認識さえまちまちである。しかし、そこをおさえずして、初期日本映画を考えることは不可能であろう。

雑誌【3】に発表した、長谷川一夫に関する論考も、それに付随するもので、歌舞伎、新派につづく、大衆演劇、もしくは大劇場演劇と映画の関わりを考える上で、そのすべてに大きな役割を果たした長谷川一夫についての素描を通して、演劇と映画の双方を緊密に関係づけて考察する必要を説いたものである。

歌舞伎台本の調査およびデータベース化に関しては、松竹関西演劇部の資料のデータ化に着手し、これを調査する道筋をつけるころまでに至った。歌舞伎台本が残存する18世紀初頭から、19世紀初頭ぐらいまでの歌舞伎台本研究は所在調査とともに、かなりの蓄積があるが、19世紀後半以降は、ほとんど未着手といっても過言ではない。早稲田大学演劇博物館の資料整理の動向にも参画しながら、とりわけ映画にとって重要と思われる明治期上方歌舞伎の台本の宝庫である同演劇部の調査を、さらに進展させてゆきたい。

地方劇場の画像については、演劇雑誌の調査によって、『新演芸』の口絵が、地方巡業の報告として、最も多い割合でこれを掲載していることを知り得た。この調査の副産物が、雑誌【2】の『劇戦』総目次で、これは最初期日本映画とは言い難いが、サイレント期の日本映画史に大きな足跡を残した劇団前進座を考える上では、逸することのできない雑誌の総目次であり、これまで全貌の紹介がまったくなかったものである。いかに演劇雑誌の研究が遅れているかの証左でもある。

『新演芸』については、増刊をふくめて102冊を電子化し画像アーカイブとするこ

とができた。

以上のような基礎的なデータベースの構築と調査を踏まえて、いくつかの発表を行った。

発表【1】の「絵画から書割、書割から映画美術」は、浮世絵にみられる風景表現の「浮絵」がどのように役者絵に取り込まれていったか、の検証を発端として、それが舞台の書割の反映とみられること、さらにそれが人形浄瑠璃に関わる絵に集中的にみられることなどを指摘した。それを踏まえて、舞台の書割が、初期映画の映画美術とどのように関わりを持つか、——具体的には、書割の応用、絵画による風景の代用、書割の流用といった実例を挙げて、その緊密な関係を紹介した。映画美術の面で、歌舞伎からの具体的な影響関係を論じたのは、おそらく初めてではないかと思われる。映画関係の国際研究会集において、歌舞伎に関連して具体的な新領域の存在を発表し得たことは、映画と歌舞伎の関係という研究対象が存在するという点をアピールするという点には、いささか貢献したものである。

神山彰氏との共編による『日本映画史研究叢書13 映画のなかの古典芸能』（森話社）図書【1】の刊行に携われたことは、映画と歌舞伎（を中心とする古典芸能）の関係を、より広く訴えるという点では、さらに大きい成果となったと考える。

同書のなかに発表した論考では、人形浄瑠璃の映画化を中心として、語り物と映画の関係に言及した。そのなかで、映画上映に付随する常磐津や新内などの生演奏の存在や、その頻度、あるいは上映作品の本数から類推される上演実態など、未踏の領域について踏み込んで論述した。

さらに、今後刊行予定の歌舞伎の事典において、映画に関係する項目をいくつか選定することができた。歌舞伎研究において、映画という領域を主張するという点では、所期の目的を達しつつあり、本研究開始当初に比して初期日本映画の研究を志す学生は明らかに増えており、そのいずれもが歌舞伎を中心とする日本演劇との関係を念頭においているようである。当該分野をめぐる研究がいよいよ盛んになるためにも、歌舞伎研究の側からも働きかけを続けてゆきたいと考える。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- 【1】 児玉竜一、「新派のあゆみと花柳章太郎」、文京ふるさと歴史館展示図録『花柳章太郎——その人と芸』、査読無、2010年、65-69p

- 【2】 児玉竜一、「雑誌『劇戦』・『劇場春秋』総目次・解題 付・前進座関係文献」、『歌舞伎研究と批評』、査読無、42号、2009年、78-86p

- 【3】 児玉竜一、「演劇と映画の往来——長谷川一夫の意味するもの」、『NFCニューズレター』、査読無、79号、2008年、7-8p

〔学会発表〕（計3件）

- 【1】 児玉竜一、「絵画から書割、書割から映画美術」、早稲田大学演劇博物館グローバルCOE主催国際シンポジウム「演劇・映画におけるピクチャレスク」、2011年1月17日、早稲田大学

- 【2】 川口小枝・犬丸治・みなもとごろう・児玉竜一、「映画『東海道四谷怪談』をめぐって」、歌舞伎学会、2010年12月11日、日本女子大学

- 【3】 児玉竜一、「画像と音声でみる新派のあゆみ」、歌舞伎学会、2008年12月13日、国立女子大学

〔図書〕（計1件）

- 【1】 神山彰・児玉竜一編、森話社、『日本映画史研究叢書13 映画のなかの古典芸能』、2010年、305p（執筆論文は99-120p）

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

児玉 竜一、早稲田大学、文学学術院、教授、  
研究者番号：10277783